

B. 指導内容・方法

1. 指導形態など

(1) 指導形態

指導形態について、以下の 5 つの選択肢から学級・教室の全体的な傾向として回答を求めた。

- a：ほとんど 1 対 1 の指導である
- b：1 対 1 の指導を中心とし、小グループによる指導を併用している
- c：ほとんど小グループによる指導である
- d：小グループによる指導を中心とし、1 対 1 の指導を併用している
- e：その他

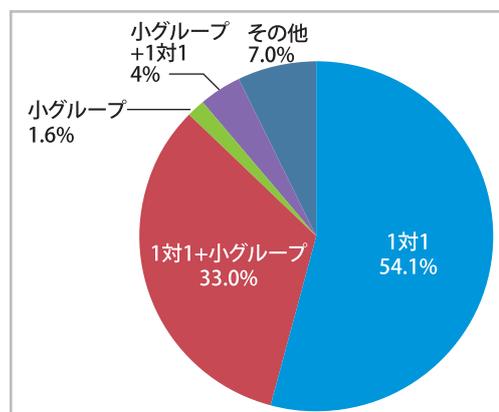


図 B-1 指導形態

回答結果を図 B-1 に示した。「a」と「b」の回答を合わせると全体の約 9 割であり、1 対 1 の指導を中心としていることがわかった。また、小グループによる指導を取り入れている「b」、「c」、「d」の回答を合わせると、約 4 割である。この傾向は、前回の調査結果とほぼ同様ではあるが、図 B-2 に示したように

「a：ほとんど 1 対 1 の指導」の割合は、減少傾向（平成 13 年：69%、平成 18 年：58%、平成 23 年：54%）である。そして、「b：1 対 1 の指導を中心とし、小グループによる指導を併用」は、やや増加傾向（平成 13 年：22%、平成 18 年：32%、平成 23 年：33%）である。

図による結果の比較から、1 対 1 を中心に指導をしている傾向は変わらないものの、小グループによる指導を取り入れた指導形態が増えている傾向が見られる。その要因として、小グループによる指導が適切であると考えられる子どもが増えてきていること、教員数の関係で小グループによる指導をせざるを得ない状況があること等が考えられる。

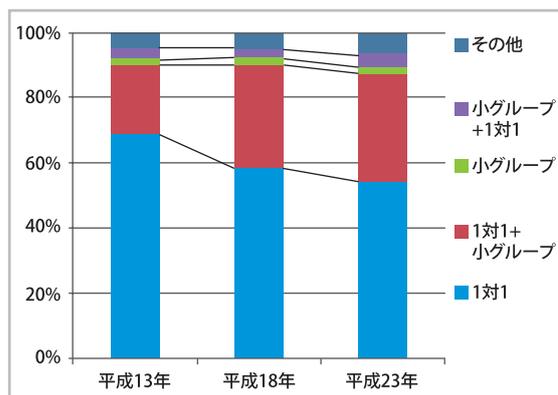


図 B-2 指導形態の経年変化

(2) 指導時間

指導している全ての子どもの指導時間について、以下の条件にあてはまる指導対象児の人数の記入を求めた。

- a：主に、通常の学級等の授業終了後である子ども（図中「授業終了後」）
- b：主に、通常の学級等の授業時間中のいずれかである子ども（図中「授業時間中」）
- c：その他

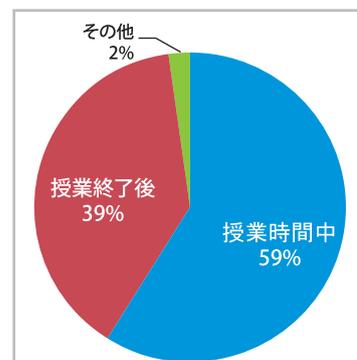


図 B-3 指導時間

この設問に記入された対象児の人数は 27,169 人であった。結果は、図 B-3 に示すように、59%の子どもが授業時間中に指導を受けており、39%の子どもが授業終了後に指導を受けていた。前回の調査結果は、授業時間中 52%、授業終了後 45%であったので、授業終了後に指導する割合が減り、授業時間中の指導が増えている。

その他の記述では、昼休み、清掃の時間、始業前、業間等であった。

(3) 設備・備品

以下に示す備品のうち現有するものの回答を求めた。

a：オーディオメータ、b：騒音計、c：音場聴力検査装置、d：補聴器特性検査装置、
e：鼻息鏡、f：発音発語訓練装置、g：発音直視装置、h：構音検査用具、i：発達検査・知能検査

最も多かった備品は、図 B-4 に示すように、「発達検査・知能検査(918)」であった。

次いで、「構音検査用具(785)」、「鼻息鏡(701)」、「オーディオメータ(484)」であった。

「発達検査・知能検査」では、20 種類程度の検査名が挙げられたが、回答の多かった順に、WISC 知能検査(556)、ITPA 言語学習能力検査(371)、K-ABC(280)、PVT(106)等であった。

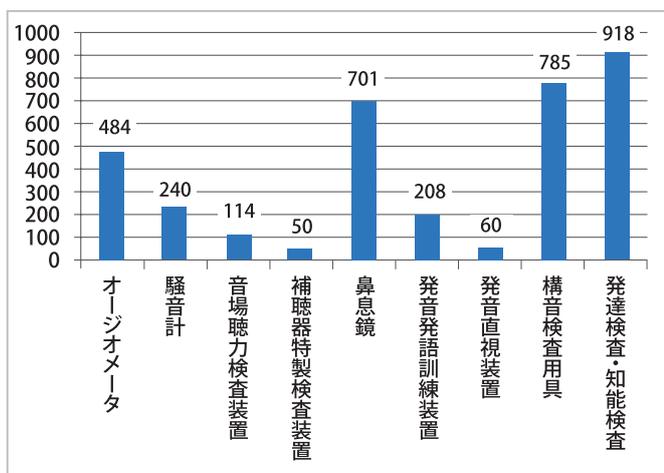


図 B-4 設備・備品

2. 指導について

(1) 難聴児の指導について課題となっていること

「難聴児の指導について、課題となっていることを記入してください」という設問で、自由記述で回答を求めた。この項目への記述は、500 件であった。

難聴児の指導についての課題として、もっとも多く回答があったのは、指導内容・方法等に関する課題(87 件)であった。担当教員の専門性の不足、十分な研修を受けることなく専門的な知識や技術を欠いた状態で指導に当たる不安が述べられていた。また、指導時間内に自立活動と教科の補充をどのようなバランスで行うかについても課題として挙げられた。さらに、指導対象児の基礎的言語力(ことばの理解・表現・語彙等)の課題(65 件)、発音の課題(44 件)と指導者側に効果的な指導法に関する専門的知識が欠如していることを述べる記述などがあった。

この他に多かった回答は、コミュニケーションに関する内容(51 件)であった。通常の学級に在籍する他の児童・生徒とのコミュニケーションのとり方、集団内でのやりとり、仲間関係や人間関係などの課題が広く挙げられており、これらの事項も含めると 72 件の記述があった。

連携に関しては、通常の学級あるいは在籍学級の担任との連携(31 件)、聾学校との連

携（11 件）、保護者との連携（34 件）等に関する記述があった。

件数は多くなかったが、障害のとらえ方に関して子ども自身の障害認識に関わる課題の記述と周囲の者（通常の学級の担任や周囲の子どもたち）の障害理解に関する課題の併記があった。また、設備として防音室やオーディオメータがないことで対象児の聴力把握や管理が不十分になることや、補聴器の管理が不十分になることが述べられていた。

（２）軽度・中等度難聴（人工内耳装用・一側性難聴を含む）の指導

「軽度・中等度難聴（人工内耳装用・一側性難聴を含む）の指導について、特に課題になっていることや配慮について記入してください」という設問で、自由記述で回答を求めた。今回新たに設定したこの項目への記述は、402 件であった。

回答内容を分類するに当たっては以下のカテゴリーを設定した。

- ・物理的環境（音環境、視覚的環境等）
- ・人的環境（教師の専門性・支援員・教員の人数等）
- ・コミュニケーション、人間関係の配慮（集団・仲間等を含め）
- ・自己意識（意識・態度）
- ・指導方法・内容（指導法・言語指導・教科指導）
- ・連携・啓発（教員間・保護者・他業種等）
- ・その他

分析に当たっては、言語障害学級・教室、難聴学級・教室を分けず、軽度・中等度難聴児への配慮と課題として、一括して行った。

最も記述が多かったカテゴリーは「物理的環境（137）」であり、次いで「連携・啓発（106）」、そして「自己意識（87）」への配慮や課題が多い記述となった。

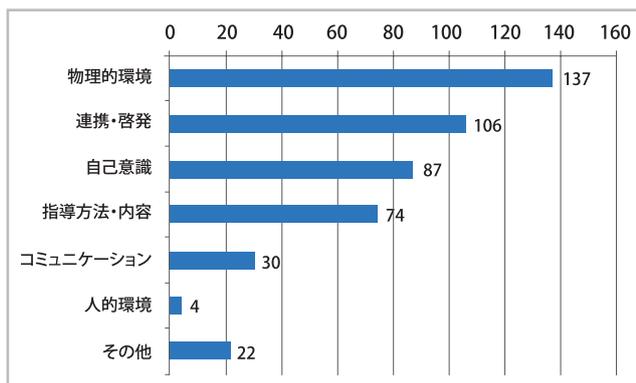


図 B-5 軽度・中等度難聴の指導

これらの記述を「配慮」と「課題」に

分けて整理してみると、「物理的環境」については配慮している事項としての記述がほとんどであり、「自己意識」と「連携・啓発」については配慮事項としての記述と課題としての記述が相半ばし、「指導方法・内容」については課題としての記述がほとんどであった。

多くの健聴児と共に学ぶことの多い小学校、中学校の特別支援学級や通級指導教室に通う児童生徒への配慮としては、騒音の軽減や情報保障など物理的な環境面への働きかけが中心となり、この面では成果を実感している教員が多いといえよう。しかしながら、児童生徒の自己意識の発達やそれを支える人間関係やコミュニケーションの面への配慮を行っているものの、その指導方法・内容や教師の専門性などの面では、課題を抱えていることが読みとれた。

（３）言語障害児の指導について課題となっていること

言語障害のある子どもの指導について課題となっていることを自由記述で回答を求めた。

回答は、1,377 校中 872 校（63.3%）から記入があった。回答の内容は、「子どもの指導内容・方法に関する記述」、「周囲との連携や理解・啓発に関する記述」、「受入体制・指導体制に関する記述」、「人事・研修・制度等に関する記述」、「設備・備品、教室環境、その他」の五つのまとまりに整理・分類できた。以下に内容のまとまりごとに列挙する。なお、記述は内容の重複を避けつつ、文意が損なわれない範囲で文言を整理してある。

<子どもへの指導の内容・方法等に関する記述>

○全体的な事項

- ・効果的な指導プログラムの立案の仕方。
- ・個に応じた適切な指導の方法。
- ・様々なニーズのある子どもにどこから指導を開始するか。
- ・自己肯定感を育むための指導・支援の方法。
- ・実践している指導がよいかどうか不安。
- ・集中力を持続させること。
- ・課題意識や、意欲、モチベーションの弱い子どもへの指導。
- ・楽しく学べる教材の工夫。
- ・主訴と実態にズレがある場合の指導。
- ・教科補充と言語指導の兼ね合い、バランスのとり方。
- ・通常の学級で本来の力を発揮できるようにするにはどうするか。
- ・効果的なグループ指導の内容やグループの組み方。
- ・指導の終了の見極めが難しい。終了の目安がわからない。

○障害別の事項

- ・構音指導に関して、般化が難しい。
- ・側音化構音等、歪み音の指導が困難。
- ・吃音について、効果的な指導がわからない。様々な考え方があり戸惑う。
- ・語彙力など、ことばの力を伸ばすための指導方法。
- ・コミュニケーション障害の子どもに対するニーズに応じた指導の在り方。
- ・発達障害を併せ有する子どもが増えており、どのように指導を進めていけばよいか。
- ・構音障害と吃音など、いくつかの障害を併せ有する子どもが増えている。

<周囲との連携や理解・啓発に関する記述>

- ・通常の学級担任との連携をどう進めるか。
- ・通常の学級担任に子どもの状態に気づいてもらえない。担任の子どもの理解。
- ・通常の学級での様子を参観することができにくい。
- ・保護者、家庭との連携をどう進めるか。
- ・保護者の子どもや通級に対する理解。
- ・保護者と話し合う時間がとりにくい。
- ・家庭環境の問題にどう関わったらよいか。
- ・医療等、専門機関との連携をどう進めるか。
- ・管理職や職員の理解。
- ・周囲への理解・啓発。

<受け入れ体制・指導体制に関する記述>

- ・通級の人数が増加していて対応が困難。
- ・待機児童が増加している。
- ・入級の希望から指導の開始までに時間がかかる。
- ・通級の時間をいかに確保するか。
- ・放課後に通級の希望が集中する。
- ・グループ指導の日程調整が困難。
- ・送迎する人や手段がないなど、家庭の事情で通級困難な子どもがいる。
- ・中学の通級がないため指導が継続できない。中学の通級が必要。
- ・幼児の通級が必要。
- ・発達障害通級教室との受け入れの兼ね合い。

<人事・研修・制度等に関する記述>

- ・異動が激しく、専門性が継承されにくい。
- ・臨時採用の職員が担当になることが少なくない。
- ・担当者の専門性、経験の不足。いかに専門性を高めていくか。
- ・一人で担当しているので、相談する人がいない。
- ・アドバイザーの不足。
- ・研修の機会が少ない。
- ・参考資料が入手しにくい。
- ・担当になる前に研修する機会がない。
- ・通級教室、担当者の数が少ない。
- ・入級の基準が曖昧である。

<設備・備品、教室環境、その他>

- ・防音設備がなく、指導に支障がある。
- ・備品が古くなっている。
- ・指導用のパソコンが導入されていない。
- ・設備・教材が整っていない。
- ・教材の予算が厳しい。
- ・職員会議や校務との兼ね合いが難しい。
- ・教材研究の時間がとれない。

上記の中でも、歪み音の指導や吃音への対応等の様々な指導内容・方法に関する事項、とりわけ子どもの実態の多様化への対応、発達障害を併せ有する子どもの指導、通級時間の確保、専門性の充実、研修の機会の確保、周囲の理解等について多くの記述があった。また、子どもを指導する、子どもと関わる上での直接的な事項だけでなく、制度や学級・教室経営上の事項にまで多岐にわたっていた。指導についての課題は、制度や経営等の要因を切り離して論じることは難しいということであろう。

上記に列挙した課題は、解決・改善という観点からは、担当者自身の情報収集、自己研修、創意工夫等の努力によって解決・改善が期待できる課題、解決・改善に向けては行政、

管理職をはじめ周囲の理解、協力等が不可欠な課題、解決・改善の糸口が見つかりにくい課題に大別することができる。

（４）デジタル教材やパソコン等の活用について

「指導において、デジタル教材やパソコン等を活用していましたら、その活用例を記入して下さい」という設問に自由記述で回答を求めた。回答は 1,377 校中 494 校(35.9%)から活用例の記入があった。回答内容が多かったものを以下のように整理した。

＜構音指導での活用＞（93 件）

- ・市販機器とソフトウェア（「あいちゃんので」、「さくらさんとことばの訓練」等）を活用している。
- ・I C レコーダー・iPod 等で発音を録音し一緒に聞いている。聴覚弁別練習等に活用している。
- ・構音指導の際、口型や舌の動きをビデオカメラで録画し一緒に見て確認している。

＜文字学習での活用＞（90 件）

- ・市販教材（「LD 児のためのひらがな漢字支援ソフト」等）を活用している。
- ・ローマ字の指導と併せて、パソコンでローマ字入力の指導をしている。

＜視機能のトレーニングでの活用＞（84 件）

- ・市販ソフトウェア（「しっかり見よう」、「学ぶことが大好きになる 3D ビジョントレーニング」等）を活用している。

＜読みの指導での活用＞（70 件）

- ・デジタル教科書（国語）の範読機能を使用（音声と文字の対応に）している。
- ・マルチメディア DAI SY を活用して読みの指導をしている。

＜語彙に関する指導での活用＞（63 件）

- ・言語発達の遅れの指導で、ことば遊びのパソコンソフトを使用している。
- ・わからない言葉についてパソコンで調べる学習などを行っている。
- ・インターネットで早口ことばや回文を調べている。

＜情報保障での活用＞（31 件）

- ・難聴児の情報保障として要約筆記を行っている。
- ・全校集会ではマイクの声が聞き取りにくいいためパワーポイントで説明するようにしている。

＜調べ学習での活用＞（28 件）

- ・インターネットで調べ学習をする。
- ・インターネットで見たことのないもの（ことば）を検索し映像とで確かめる。

少数例ではあるが、難聴のある子どものための「テレビ会議システム」や「ビデオレター」の活用、吃音のある子ども同士の「テレビ通信」など同じ障害のある子どものネットワーク作りとして活用しているという回答があった。

＜活用できていないという回答＞

デジタル教材等を活用できていない理由等を記述した回答が 11 件あった。「教室にパソコンはなく、活用したいがむずかしい現状」、「指導用パソコンが配備されていない」、「使いたい教材はあるがパソコンが指導につかえない」など、教室設備の課題、「デジタル教材にどんな教材があるか教えてください」などデジタル教材等の情報に関する課題が見られた。